町史とっておきの話 245

只見野鳥雑記 ②

なぜ減ったツバメとスズメ

◀ツバメやスズメが好んで巣を作った農家住宅

「ツバメもち」という興味深い民俗行事があることを布沢の小林彦衛さんから聞きました。ツバメが渡ってきて初めて巣づくりをはじめた日、もちをついて巣の下に供え、家中でお祝いをしたということです。これをみても、いかにツバメがたいせつにされてきたのかがわかります。今でもツバメは吉を呼ぶ鳥とされ、ツバメの巣が集まる家は栄えるといわれています。ツバメは田んぼの上空を縦横に飛びまわって害虫を食べる益鳥です。いまのような農薬のない時代、ツバメは農薬代わりの生き物、すなわち生物農薬として重要な野鳥だったわけです。

同じく人家に巣をつくるスズメは、実りの秋になると大群で稲の穂を食い荒らす害鳥でした。ですから巣が見つかれば取り壊され、田んぼにはスズメ追いとしてカカシや爆音機が据えられました。

これほど身近だったツバメとスズメが近ごろ、その数を減らしてきていることにお気づきでしょうか。すこし前まで、春になれば数つがいのツバメが電線でさえずり、家のあたりを乱舞していたものです。既中門造（うまやちゅうもん）りの牛小屋の天井には必ずツバメの巣がありました。カヤふき屋根や板壁にあいた隙間はスズメのかっこうの巣作り場所でした。どちらも子育ての真っ盛りはうるさいほどにぎやかだったものですが、それがめっきり見られなくなってきたのです。

その原因は、まず巣作りできる場所が少なくなったことがあげられます。スズメの巣作り場所だったカヤ屋根や板壁、冬の居場所だったカヤの雪囲いなどはすっかりなくなってしまいました。ツバメの繁殖場所だった既（うまや）もありません。現代の住宅はトタン屋根となり、壁はサイディング張り、そして凹凸の少ない高気密住宅です。清潔で衛生的な現代住宅では、ツバメはやっかいな鳥にもなってきました。巣の下に泥をまき散らし、ときには巣にダニが発生して屋内まで入り込んでしまうのです。それが嫌われて、巣が落とされてしまうこともあります。さらに都市部では宅地開発によって農地や荒地がなくなり、ツバメの巣材確保がむずかしくなっています。また、越冬地にわたる前、ツバメが集団でねぐらとする広いアシ原も少なくなってきました。ツバメが減ってきたのは、住宅難と巣材難、そして農業離れによる保護意識の低下があるように思われます。

一方、スズメの減った理由は、住宅難のほかに、産卵数が減ってきているという報告があります。三十年ほど前の平均産卵数が六個だったのに、現在の産卵数は四個前後だというのです。スズメの世界も、人間と同じく少子化の波が押し寄せているといえそうです。どうして産卵数が減ってきているのかはわかっていません。いまではスズメのいない空間に、ハクセキレイが侵入して、わが物顔で家の周辺を歩き回っています。スズメはハクセキレイに生態的な地位を奪われてしまったといえるかもしれません。

スズメは減っているのに、ニュウナイスズメという野鳥は以前と変わらずに生息しています。これは里山の雑木林に住み、頬に黒斑がないスズメです。鳴き声もチィー、チィーとスズメより澄んだ声で鳴きます。田子倉ダムサイトや只見町青少年旅行村などでふつうに見られます。また、晩秋のころ、スズメの群れに混じっていることもあります。

わたしたちにとって身近な野鳥だったツバメとスズメが減ってきているのは、住宅の近代化、生息環境の改変、そしてわたしたちの意識の変化が微妙に関係しているのかもしれません。

▲すっかり数を減らしたスズメ

日本野鳥の会会員
新国　勇